

二〇二四年(令和六年)六月一日發行(毎月一回一日發行)

香蘭

第一〇一卷第六号

村野次郎創刊

香蘭

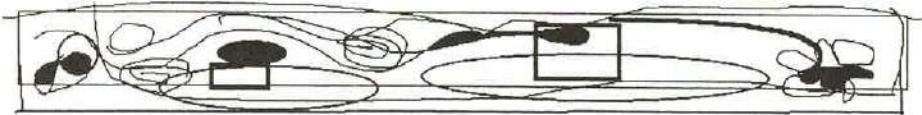


2024年(令和6年)6月号

第101卷

第6号

通卷1122号



香蘭

2024年(令和6年)6月号
第101巻 第6号 通巻1122号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌（106） 満木好美：表二
近詠十五首 春になれば 松沢みどり 2
一
作 品

卷之三

推薦香蘭集

作品一
十首翼（四月号）丸山三枝子翼

十首選
（四月号）
大山三枝子選

一頁公論
⑯ 私が着物を着る理由 小 笹 岐美子

村野次郎への旅（170）昭和期の「香蘭」（五）…………千々和久幸：

「香蘭」とともに(8)言うなれば客……………鈴木桂子：

統・醉風船(6)偶然の妙味……………千々和久幸

エッセイ・自由研究
『平家物語』を読み終えて…………… 中井房江

焦点 点 (四月号) 一年の終り、始まりの歌 石井雅子

七首 挑(西用等) 宫原・藤本・会沢・山本
江口清代「山茶花」平(西用等五首) 八木喬・羊子

江口紹作「山茶花」詩(四月号)題詩十五首
八木橋淳子
高畠憲子

作品三 関口静子

香蘭集
高田みちゑ

緑地帶……………沙阿羅・中村(か)・新井・石川

注目結社発行の小冊子

歌会及び会合・会員消息・他

編集後記・新宿日記
表紙絵……山口 蓬春「桃」
目次・緑地帯カツト……和田 和 60

満木好美

村野次郎作品 私の愛誦歌 (106)

楼門をいでてゆきたるからかさの

明く見えて雨あがるらし
あかる

この作品は『橋風集』の昭和九年「日光」と小題のつく一連の一首目に置かれている。このとき村野次郎は四十歳であった。

『橋風集』

一読してすっと立ち上がる光景は、新緑に囲まれた楼門を、傘を差した女の二、三人が話をしながら出てゆく。傘の色がにわかに明るく見えてきたから、先ほどまで降っていた霧雨が上がったのである。この時の先生の視線は、ここより離れた少し高いところの建物の中にあつたよう感じられる。俯瞰しているように思う。この歌がおよそ九十年も前に詠まれたとはとても思われず、つい今しがた詠んだ歌と言つても通ずると思う。

佳き歌とはこのようにいつになつても風化せず生き生きとしている。

世界のあちらこちらで戦争が起きている昨今、この静かな色鮮やかな歌が、私の心にしみわたってきた。

(短歌新聞社文庫『橋風集』35頁、『村野次郎三百首』
31頁に掲載)

四選者 の 作品

さくらのある日

平塚 千々和 久幸

三月のあした降る雪ふみて行く立入禁止区域にも降る

十三夜月

我孫子 丸山 三枝子

開花予報は雨にたたられ予報士が三度目の開花予報告げいる
自衛隊幹部の靖国参拝を「私的な」土竜に笑われている

いまじぶん下手な歌詠みに囮まれてあなたは熱弁奮つてあらん

情欲の残りているか耳に手をあて遠くより来るかぜを聞く

欲情に遠くはあれどステーキを食わんとタベの街に出できつ

ことさらに日常世俗の泥濘に踏み入りことを面倒にする

老いて死ぬただそれだけの時の間を難しく生き苦しむものか

妻の夢知ることもなく逝かしめし凡夫が見て いる今年のさくら

和泉式部研究会 鎌倉 高畠 恵子

百子さんの案内にゆらり平安の御簾がゆれをりキルビー教室
和泉式部の溜息いまに聞こえくる歌読みあぐる声のひびけば
明日の命わからぬなどと詠まればたら我なら何と返しただらう

平安朝にしばし遊んで日が暮れて令和の厨にもやしを炒む
道長が袖たくしつ磨る墨の香り立ちたりテレビ画面に

王朝のドラマに現代語訳の和歌流れ椅子から転げてしまつたわたし

香蘭の福岡大会に日にしたり御堂関白日記展ボスター

福岡にすれ違ひたる道長の日記に逢はむ いつかどこかで

十七夜月

長崎

店頭に売れ残りいるプリムラを買って帰りぬ 十三夜月
売れ残りの薔薇、菜の花挿して置く春の仏壇 花御堂めく
春彼岸 墓域の草をひきぬけば玉砂利ひとつよんと飛び出す

公園のラジオ体操はじまつた 暇で元気な人らが集う
新しい朝 とぞ唱う、人生の終わりに一歩近づく朝だ

朝が来て夜になりまた朝が来て私のパソコン固まつたまま
嘘ひとつ吐きて帰りぬ うつくしき嘘 と詠みけり斎藤史は

十七夜月 東京 桜井京子

長崎は思案橋局からのふみ吹雪のよるに速達でくる

ふるさとの川に降るゆき春のゆき今宵は降ると思ひて眠る

欄干に並んでゐるのは都鳥かぜに吹かれて騒立つころ
菜の花に飽いたら次は鬱金香ひらひらと行く浮氣 ころは

ひとつ咲けば次つぎひらく冬つつじ負けん氣なるは諭しきことぞ
緑道の木立の番号見てゆけば十一番目の多羅葉の木よ

日が暮れであれからあなたは帰り来ず 恋と革命 なんて言ひしが
この辺で放りだしでもいいかとも背負ひ来たるは十七夜月

作品一 十首選



(四月号作品から)

丸山 三枝子 選

・大寒の菜の花畠を見つづく令和六年睦月の歌会

相川 公子

今年の「大寒」は一月二十日。年が改まつてはじめての「歌会」かも知れない。菜の花畠の菜の花はもう咲いていたのだろうか、これから咲く状態だとも思える。よく通る道だから、菜の花畠と知っているのだろう。年始めの歌会に趣く作者の心弾みが窺える。特別なことを言つてはいる訳ではないが、新年の歌会に趣く心弾みがさらりと詠まれ心地良い。

・この海は能登の海にも續くなり斯くも穂やか正月二日

青山 侑市

元日の夕刻に起つた能登半島地震は、日を追うに従つてその被害の大きさが明らかになつてきた。作者の住む鳥取県米子市は、日本海に面している。太平洋ブレーントの延長線上に日本海の能登半島ブレーントがあるそうだ。後に分かつことだが、米子市に避難した被災者もあり、作者の「正月二日」のこの感慨は、とても自然な感概と読んだ。正月二日の穏やかな海面は風の前の静けさのようで不気味に感じられたかも知れない。不穏を孕む穏やかな海面。

・新しき暦に六輝記されあり大安吉日こだわらずなりて

年末になると、新しい年の暦を準備する。その準備した暦を一枚ずつ捲つて眺めている作者が浮かぶ。その暦には、先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の「六輝」が記されている。因みに、先負は、平静を守つて吉、午前は凶、午後は吉の日であるらしい。赤口は、大凶の日。作者の年齢になると、そんな暦の言葉にはもう拘らない、と言う。齡を重ねるほどに人生経験が豊かになる。新鮮な感動が薄まつたというのではなく、作者自身のカレンダーで生きているのだろう。「六輝」の言葉を知らなかつたのでここで学んだ。

・お隣りは三時になれば雨戸繰るそれを合図にわれは米研ぐ

斎藤 俊子

一読、クスッとさせ立ち止まつた。お隣さんは、早寝早起きの暮らしであるかも知れない。それにしても三時は早い！早いから歌になつたのだろう。その隣人が雨戸を繰るのを合図に、夕飯の米を研ぐ作者の暮らしも窺え、嬉しい歌だ。余談ながら、私は昼食後の洗い物の後に夕食の米を研ぐ。思わずクスッとさせられ、ユーモアもある嬉しい歌で立ち止まつた。

・一日の無事を願いて声掛ける遺影がいつしかお守りとなる

白井 紗子

これも作者の日常のルーチンが見えてくる。ここでは一日の始まりの朝の習慣。遺影はご主人であろう。その遺影に水と御飯のお供えをして供花の水も替え、今日も一日、つつがなく過ごせますように、と手を合わせる作者。その合掌は祈りのようにも思えてくる。

三句以下のフレーズに、理屈抜きで納得された。無言ではなく、「声

朝香ふさ枝

掛ける」に臨場感が隠る。作者のなかにはまだ主人が生きているのだろう。三句で一拍置いて読む感じにして、結句を「お守りとなり」の言いさしの形にして、初句に戻る詠み方もあるうか。

・長命も考え方と嘆くとき知恩の鐘のテレビに響く

谷本 朝江

長命の作者は住まいの施設で、クリスマスにはケーキとチキンを食べ、〈居心地は悪く無けれど終の場と思える時に湧ける虚しさ〉とも詠む。時々子や孫とも会い、何ら不自由は無いのだけれど、精神的な充足感には乏しい思いもあるようだ。そんな時にテレビから響いてきた「知恩の鐘」の音に、心洗われる思いと共に、自省の念も去来したかも知れない。「知恩の鐘」は京都知恩院の除夜の鐘、大晦日のテレビで聞いているのだろう。上句からは、常に死を意識した長命への深い諦観と、それに矛盾した思いが交錯する。

・寒に入り雪中四友のことばを知る蠟梅の香の満つるリビング

土井絢二郎

「雪中四友」とは、文人画に好んで描かれた早春に咲く芳香の、梅、蠟梅、山茶花、水仙のことらしい。作者は、その一つである「蠟梅」の花と香りを外ではなくリビングで楽しんでいる。作者の家か、友人宅のリビングかは分からぬが、蠟梅の一枝をそこに飾った人がらこの蘊蓄を聞いているのだろう。そんな場面が想像される。

・包丁を出し放しにするなんて老いの深さを突き付けらるる

西野美智代

持病の痛みとの闘いのなかの一首。とは言え、作者の日常にはあり得ないうかりミスなのだろう。それを一首に詠んで吾が身の老

いを叱りつけている。老いることが悔しくて仕方がないのだ。老いやくことの悔しさを持って行きようがない、という風情だ。上句の呆れ返ったような驚きを受ける下句がなんとも切ない。ここでは失敗を短歌に詠んで、これからは気をつけなくては、との自戒を新たにする作者が彷彿とする。

・女ひとり老いやく窓の一夜さを雪の舞いおり もつと舞え舞え

宮原 迪恵

ここでも「老い」が詠まれている。二句の「老いやく窓」の、いくぶん舌足らずぎみの措辞があまり気にならない。むしろ「老いやく家の窓」と正確に詠むと、もたもたした感じが気になってくる。この辺りの省略は納得である。老いやく日々の一夜に降る「雪」。

ここでも「降る」ではなく「舞う」の言葉選びに納得させられる。「舞う」に呼応させた一字空けの結句の「舞え舞え」の命令形からは、自らを鼓舞する思いが偲ばれる。

・初雪は十日遅れてやつて来て歌会帰りのわれを濡らせり

八木橋洋子

天気予報よりも、「十日遅れて」降った初雪という事だろう。予報が外れることは珍しくはなく、その意味ではこの上句は念を押し過ぎではないか、と一読思ったが、ここでは「初雪」と「歌会帰り」の言葉がそれを補つて、面白い味わいを醸し出している。歌会の帰りに雪が降ってきた、と言っているだけの歌ながら、その雪が、「歌会帰りのわれを濡らせり」と結んだことで、俄然雰囲気が盛り上がり始めた。歌会での成績はどうだったのか。それは言わぬが花で歌が膨らんだのだ。初雪の擬人化が自然で短歌のツボを心得ている表現だ。

作品一、三 十首選



(四月号作品から)

渡辺礼比子選

根

田中あさひ

・いつ来るか何の鳥かはわからねど日に日に減りゆく万両の実は

丑山 真弓

正月の飾りとして玄関前に置いた万両の鉢の、日々の変化を連作で詠み、観察の行き届いた魅力ある一連。掲出の一首は、「いつ来る

か何の鳥かはわからねど」と表現して、日々の減っていく万両の

実を眺めながら、実を啄む鳥たちの姿に思いを致している。凡人なら、正月の縁起物とされる万両を傷める鳥たちに恨み骨髓というところだろうが、この作者はすっかり歌詠みの目になつて、この一連をものとした。

・子守りして嫁さんエステに行かすとどう新米パパのプレゼントよき

小笠峠美子

最先端をゆく若い夫婦像が目に浮かぶ。ひと昔前なら、鑿磨を買うエピソードだったかもしれないが、時代は変わったのだ。パパが幼児の御守をしてママが医者や美容院に行くという話なら聞くこともあるが、このママの行先は何と、エステだという。子育て中の女性にとって、エステの解放感は何よりのプレゼントになつたにちが

いない。わが兒は、まだ乳児、ミルクやおむつの世話にパパは大奮闘の一日を過ごしたことであろう。そして、もしこれが姑の立場にある人の作品だつたとすれば、作者はなかなかの大人物と見た。

・地中にて冬をねむらむ現れてにくまれる薄、藪枯らし、葛らの太モミジ

嫌われ者の植物が冬は地中で静かに眠つていいようと考へたとしたら、なんだかいじらしい。「にくまれる」というタイトルからして、喻に包んで人間の内面を詠んでいる作品のようにも読める。いや、思い切つていえば、作者は、外部の世界を怖れている非常にナインな人物なのかもしれない。冬になると姿を消してしまつこれらの植物を身にひきつけて詠んだ心理詠として、共感した一首だつた。

・大津波警報つげてテレビはも逃げて逃げてと必死の叫び

中井 房江

遠方に暮らしているから、ふるさとが大地震に襲われてもただただ報道を見ているしかない。テレビのいう「逃げて逃げて」は作者自身の声そのものであり、手を挙げてテレビを見ているしかない焦燥感がひしひしと伝わってくる。家族の安否、今は無くなつてい

る家、ふるさとの人々など、あらゆることが頭のすみを過つたことだろう。テレビを見て詠んだ歌は、二次感動などと批判されることも多いが、この一首には、関係者としての悲壮感が漲つてゐる。

・そばにいてうたた寝しながら観たる日よ夫逝きてもう観ないマラソン

中村 陽子

上の句の長閑な満ち足りた気分が、下句で一転してうら寂しいトーンに変わる。連れ合いを失うと、共にしていた空間そのものがまつ

たく違つて見えたということだろう。なんでもない日常の中に喜びも悲しみも潜んでいるということをあらためて思はされ、はつとさせられた一首。声高でない、寂寥感滲む挽歌と読んだ。

・恋の歌愛の歌など詠わずにわたしはこのまま朽ちてゆくのか

馬場 美信

この一首を詠んだとき、ああ言いたがつたことをいつてくれたなあと膝を打つた。例えば『万葉集』では「相聞」と「挽歌」を大きな部立とした。『古今集』、『新古今集』でも恋愛は重要なテーマであった。私たちも歌詠みなら、一度でもいいから華やかな恋の歌、愛の歌を詠んでもみたいものではないか。年をとつても恋愛をするのは自由だし、私たちは創作をしているのだと考えれば、架空の或いは理想とする恋愛を歌にしたつてかまわない。ただし、過去の恋愛をそのまま詠むのではなく、ただの過去回想になつてしまふ。そこは加工して詩味が感じられるようなものでなくてはならないだろうと、あらためて、自戒をこめて思ったことであつた。

・不要品集めて捨てるその中に忘れられない恋を紛らす

藤本佐知子

馬場さんの歌に統いて、掲出の一首も「恋」がテーマである。しかしこちらは「忘れない」ものとして、胸の中にまだ恋の火が燃っている人の歌である。ここでは、結句の言葉の斡旋に特別な工夫がみられる。「忘れられない恋を紛らす」と表現したのは作者の詩心であり。現実には手紙とか写真の類いであつたとも想像できるが、それをいわば「不要品」と言い切つたところに、作者の決意のほどがうかがわれる。

・「おじいちゃん今日の夕食は焼きそばよ」「おうおうそらつこつ

おだのう」

奥田 富栄

孫と祖父と二人の会話がカッコで括られ、ほかには何も付け加えられていないが、それだけで何者にも代えがたい、温かい家庭の雰囲気が伝わる。今晚のメニューを祖父に知らせる孫娘、それに応える「おじいちゃん」の素朴で無心なお国訛りが、絶妙に呼応している。感動の核をいかにそのまま切り取つて詠むかが、歌を成功させる秘訣の一つだと気づかせてくれた一首。

・あなたから切つてください年賀状「会いたいですね」が虚しく踊る

中島由美子

共感する人が多いのではないか。これまで長く会おうとすることもなかつたのに年年の賀状に「会いたいですね」というセリフを見かけることはよくある。もちろん心からそう願つてゐる場合もあるだろうが、社交辞令だとしたら、いかにも薄っぺらな虚しい表現である。人情の機微を巧に切り取つた歌。

・あの角は店が何度も入れ替わりどこへ行つたかヤドカリたち

藤田 祐恵

近頃はよく見かける町の風景である。めまぐるしく店舗の変わら一角というのがあるものだ。便利な店ができるたゞ、こちらはあてにして、出かけてみると、全く違う店になつてしまつてゐたという経験が筆者にも何度がある。そういう店というのは概して、コンビニとかピザ屋とか居酒屋、ファミレスなどが多い。これらの店では、従業員の入れ替わりも激しく、こちらが顔を覚える間もなくどこかへ消えてしまう。彼らのことをヤドカリとはよく言つたものだ。

春になれば

松沢みどり

すこしづつ日差しがまぶしくなつてきて行き交う車が春を告げいる

澁のように疲れがたまつた金曜は光沢のあるプラス選ぶ

同僚が辞めると聞いて目の前の景色が急にざらつきはじむ

困ったときは連絡してと渡されしメモ紙 君の結婚間近

わたくしの心はどんな色だらうまつさらでない黒ビール飲む

ざらついたかかとにクリーム塗りながら明日の仕事は忘れてしまおう

辞めたひとともうすぐ辞めるひとがいてスペインワインのグラスを空ける

異動した課長が春に辞めること告げられており 花見はしない

なんとなく予感はしていた、していたが そうか やっぱりそعدたのか

辞めたひとは「辞めて幸せ」と言いながら私の肩を撫でて去りたり

ビール三杯空けても頭は冴えてきて静まつた街をひとりで帰る

ひと言隨想 窓から見える桜

三月も中旬を過ぎると桜がぽつぽつ咲き始める。否応なしに春がやって来た。寒さに震えて毛布にくるまつたまま、私はどこにも行きたくないのに、木の枝いっぱいに咲き乱れる桜に、動け、走れ、と強要されているような錯覚にとらわれる時がある。

職場では親しい同僚たちが五人も辞めるという。そのうちの一人はかつての上司である課長だ。本当にいなくなるのか、とまだ信じ

られないようないでいる。当たり前のよう

に目の前にいた同僚もいなくなる。それでも泣いたりはしない。

人がいなくなつてもその仕事は他の誰かに引き継がれ、何事もなかつたように日々は過ぎてゆく。私も何事もなかつたように机に向かうだろう。だが本当は、私はどこへ向かえばよいのか分かつていない。この窓から見える桜も明日咲くだろう。

退職するひとを思えば誰もみなわれに微笑み残して行けり
春になれば決まつたように花が咲くわたしはどこへ歩いて行こう
疲れたから咲かずに休むという声すそんな桜があるかもしけず
髪を切りあらわになつた首すじを風が撫でゆくああ春なんだ

一頁公論

(37)

私が着物を着る理由

小 笹 岐 美 子

私が着物を着る理由は、主に三点ある。

- 1 ひどい外反母趾で踵の高い靴が履けない。
- 2 着物なら体の線を隠せる。
- 3 着物には洋服ほど流行がない。

つまり退職後の私にとって、外出着に着物は最適なのだ。退職する時の挨拶で「これらはジーパンと着物で過ごします。」と言ったので、歓送迎会をスタートに宴会は着物で参加した。今ではすっかり定着し、雨模様で着物を着ていないと、おやどうしたの?と言われるようになつた。もともと着物は好きで、子育てで忙しい時期でも、正月三が日は着物で過ごすようにしていた。着物に割烹着は、主婦と母親に戻る私の制服だつた。

とはいって、着物は高いでしょうとよく言われる。ところが着物を着ていることがわかると、よくしたもので着物が集まつてくるよう

になる。世の中には着物は持つてゐるが、筆筒の肥やしなつてゐる人がいるのだ。買いたり業者もいるが、思い入れのある品だと売るのは抵抗がある。誰かが大切に着てくれるなら讀りたいと。

そんな経緯で何本かの帯や着物が私の手元に届いた。それに、最近はリサイクル店で掘り出し物に出会うこともある。元の価格を知つていると、申し訳なくなるような値段で、身

丈や術丈の長い私にも合うものが手に入るの

は嬉しい。

何よりも着物には物語がある。知人や身内から譲られたものは特に。私が好きなのは、礼装用ではなく普段着や街着の織の着物。紗の着物に染の名古屋帯の出番が多い。それでも年に一度は締める袋帯がある。五十歳で急逝した従姉妹のものだ。早期退職して茶道教授として暮らそうと茶室のある家を新築したばかりだつた。しばらくしてお悔やみに伺つたとき、叔母は泣きながら草笛から投げ出す

・羽織を脱いで「こういうのを、裏勝りといふんですよ。」と、見事な手書きの龍を披露してくれた。

・羽織には見事な龍を隠しつつ着物の老人穩やかに笑む

最近、義理の娘が学校行事に着物で行きたいと言うようになった。

・入学式にお義母さんの着物着たいとの甘え上手なうちの嫁さん

着付けは、専ら私の役目だが、本当に着たければ何とかなる。私も習いに通つたことはないし、今はネット動画で分かりやすい着付けアドバイスも多い。そのうちに自分で着れるようになるだろう。二人の嫁さんと一人の孫娘が、私の着物や帯を受け継いでくれることを密かに願つていてる。

わることを詠つてきた。着物特有の言葉もあるので、詠み込んでいきたいと思う。

・花の季の過ぎて桜の帯ひそと畳紙の内に次の春待つ

・羽織からわずかに紅絹裏のぞかせる「築地明石町」の清方の粹

・長羽織着て昼下がり清方の「築地明石町」ひとり見に行く

・羽織を脱いで「こういうのを、裏勝りといふんですよ。」と、見事な手書きの龍を披露してくれた。

・羽織には見事な龍を隠しつつ着物の老人稳やかに笑む

最近、義理の娘が学校行事に着物で行きたいと言うようになった。

・入学式にお義母さんの着物着たいとの甘え上手なうちの嫁さん

着付けは、専ら私の役目だが、本当に着たければ何とかなる。私も習いに通つたことはないし、今はネット動画で分かりやすい着付けアドバイスも多い。そのうちに自分で着れるようになるだろう。二人の嫁さんと一人の孫娘が、私の着物や帯を受け継いでくれることを密かに願つていてる。

「香蘭」とともに（8） 鈴木 桂子

—— 言うなれば客 ——

閑話休題。再び横山慎夫のことなど。

氏が亡くなられて間もなく三年になる。私は、氏に誘われて香蘭に入会し、短歌を始めてまるまる十三年、この春十四年目を迎えることができた。横山氏との出会いがなければ、おそらくこうして今私がここにいることもなく、十三年という長い歳月を短歌とともに歩むこともなかつたと思われる。深謝。

行員が突然消えてシャッター下ろし機械だけの店舗になつた横山慎夫（平31・2）
元銀行員の氏は、こうなる前の銀行員の典型的みたいな礼儀正しさと、職業上のテクニックなのであろう、磨かれた人扱いのうまさとを合わせ持つておられた。言うなれば私は預金をしにやつて来た客のようなものである。

落ち度なく、丁寧に、かつ心をこめて預金をすすめられ……。かくして私は香蘭で短歌を作り始めた。

なぜか氏は、殆ど短歌の話をされなかつた。

入会からほほ十年近い歳月を、ともに香蘭誌上に在りながら、作歌のためのアドバイス的なことを話題にされたことは一度もない。ただ入会の前に一つ、入会の後に一つ、手渡されたものがある。前者は代表の全国大会での講演か何かで、かなり長い現代短歌についてのコピーであつた。「すばらしい人なので読んでみて下さい」と一言。そして後者は「才能豊かな人だから読んでみて下さい。作者から直接送つてもらうよう頼んでおきました」と一言。送られて來たのは桜井選者の「冬となりに」であつた。といつても、それらの内容について語るでも訊くでもなく、その後、この二つ以外の、短歌にまつわる話を聞くことはなかつた。氏が香蘭賞を受賞されていることさえ、ずっと後で別の所から知つた。どうしてか短歌については極端に寡黙であった。

その寡黙の真意は、いまだよく分からぬが、私の短歌をきちんと読まれていたことはまた事実である。ネットの投稿に「いいね」が付くように、月により「いいね」の一言が送られて來た。十年來、亡くなる二ヵ月前までとだえることなく、「いいね」は届いた。私はその「いいね」に先導されて歌を作つて來たようなものである。その「いいね」も投稿も、令和三年六月末に止まつた。氏が病氣であるなど予想だにしていなかつたが、間もなく亡くなられた。香蘭の歌のどこを辿つても、氏の投稿に病氣の影はあるでない。

朝は四時に起きパソコンに向かう。お酒が好きで晝は刺身と決まつていた。スーパーでの買物を楽しみ、三枝島之氏の歌を楽しみ、歴史小説を樂しまれた。国会中継、政局に関心があつた。奥さまをこよなく愛し、亡くなられた後は奥様と旅をした北海道をワンボックスのワゴン車で一ヶ月旅行。ご両親も歌人にて、お父上は六十数年前に結社を立ち上げ、現在栃木県下で唯一残る結社となつた。弟さんは弁護士、お子さんやお孫さんの話もよくされていた。

離れ住むひとりの食事に気遣いあれこれ思う酒飲みながら 香蘭（令3・5）
・新聞を読むとき香蘭誌読むときは眼鏡を替えて視力を合わす 香蘭（令3・9最後）
歌には邪念なく超然と自らの意志を生きた姿が残る。私には「妻も私も人に恵まれて幸せだつた」という言葉が「さよなら」のかわりに残された。

続・醉風船（6）

千々和 久幸

偶然の妙味

久し振りに「中央公論」が読みたくなった。そこでふらり街の本屋に立ち寄り、直近の2024年4月号を買って来た。わたしは大学時代に「中央公論」を購読していたからである。ついでに暇つぶしに新書版の本も二冊買った。わたしは大学の一年次より卒業まで思想・評論を中心とした「駿台論潮」編集部に籍を置いていたから、教科書よりも時代の空気を知るための本を多く読むようになっていた。「中央公論」でいちばん最初に目を通すのは、巻頭論文であつた。そこにはこの時代の最前線にある思潮、知見が掲載されていたからである。わたしが大学在学中に読み得たのは、例えば梅棹忠夫「文明の生態史観」、藤原弘達「天下泰平論」、同「岸信介論」等がそれであり、また巻頭ではなかつたが中根千枝「タテ社会の人間関係」も初出は「中央公論」だった。

わたしが大学に在籍した1955年（昭30）～1959年（昭34）の間に読んだ「中央公論」は、硬派一辺倒ではなく谷崎潤一郎の「健」や村松梢風の「女経」といった軟派（小説やエッセイ）の頁も組み合わされていた。だが何と言つても一番関心を持つて読んだのは、巻頭論文が提起する社会思潮の在り処であった。さてこのほど五十年振りに読んだ「中央公論」4月号の巻頭は、

論文ではなく3本の時評であり、次いで鼎談であつた。出席者は細谷雄一、東野篤子、小泉悠也でテーマは「ウクライナが戦争を変えた」であつた。わたしは鼎談はすつ飛ばして、真っ先に前田啓介のエッセイ「消えゆく『戦中派』の記録と記憶 生誕100年、岡本喜八の痕跡を辿つて」を読んだ。これが一番面白そうだったので、

そして暇つぶしに同時に買った単行本の一冊は、これが何と偶然にも同じ作者である前田啓介著『おかげゆうて、やがてかなしき—映画監督・岡本喜八と戦中派の肖像』であつたのだ。岡本喜八は斯界では鬼才と言われた映画監督で、かねてよりひそかに墨鏡にしていた監督の一人である。偶然と言えばこれほどの偶然もない。

ついでに言えば、ダンディと言われた岡本喜八は同学の先輩（明治大専門部卒）であることは承知していた。わたしは同監督の名作『日本のいちばん長い日』よりも、ハチャメチャで痛快無比の「独立愚連隊」の方が忘れられない。偶然といえば先の前田啓介の著書で知ったことだが、驚いたのは岡本喜八が大学卒業後、東宝の入社試験を受ける前に万一心に備えて、ひそかに日本タイプライター社を受験し、採用が決まつていたというのだ。実はわたしもその日本タイプライター社に合格し、一年半ほど在籍していたのである。しかし保守的で退屈的な社風が嫌で一年半で退職したのだが。

もしもわがが「中央公論」を手にしなかつたら、前田啓介『おかげゆうて、やがてかなしき』を買わなかつたら、岡本喜八の詳細な履歴を知ることはなかつたし、ついでにこの「偶然の妙味」もなかつたろう。生まれたのも偶然なら死ぬのも偶然、この世に歴史的必然も必然命題もありつこないのである。

村野次郎への旅（170）

昭和期の「香蘭」（五）

千々和 久 幸

今井嘉雄、村野次郎。彌生集（短歌）には神谷葛三、大貫迪子等十七名。今井嘉雄の一人一首評、橋本敏夫の「ある日の平賀元義」、若菜集（短歌）に十六名、春光集（短歌）に十四名、陽炎集（短歌）に今福公一、森山茂等二十八名。川村浩の「谷川英一君の死」「六號雑記、歌會記事、編輯後記を加えて五十六頁の編集である。

「香蘭」第五卷第三號は昭和二年（1927）三月一日に発行された。編輯兼發行者は

田中次郎、奥付は前号と変わらぬままである。

書裏書き及び題字も北原白秋のままである。

変わったところと言えば、巻頭に北原白秋の詩「風景は動く」が掲載されていることである。左に引く。

風景は動く

北原 白秋

村野次郎、穂積忠、橋本政一、清原齊、本間樂寛、冬野木枯、川村浩、柿谷伸、石野正太郎、荒木暢夫、橋本敏夫、酒井廣治、杉浦翠子。

そして本間樂寛のエッセイ「飛躍せよ昭和の歌人」。次の短歌欄は十一名が出詠、芥子澤新助、成田憲三、松丸麿一郎、眞島勝郎、西野紫行、若林昇、久米蒼月。

次いで前月歌壇合評は杉浦翠子、橋本政一、

畠の電柱は弯んで薄紫に光つてゐる。
春だ。春だ。

風景は動くより
代弁したものであろう。

た冬に倦み、春を待ち焦がれる会員の気持を

次いで当月の目次を見ておこう。最初の短歌欄の出詠者は以下の十三名。

例によつて、村野先生の巻頭作品から読んで

雨の日

村野 次郎

①はかどらぬ仕事いらだたし街角をきしる電車の頭に慶ふなり

②春の雨土を濡らして降りて居り冬さりてわ

れのなごむこころか

③降りいで日ぐれわびしき電車の中乗り來る人もしとど濡れたる

④このをとめざしてよき子にあらねども何となくわれのこころをひくも

⑤いま下車りてゆきにし人のすがたすらへだたり見えず夕雨の中に

季節は風と光に乗る。風と光とに絶えず動

凡ては流れる、有りの儘に。
まかせよ、さながらの薰りを、
まかせよ、寂びと撓りと。

水墨集より

季節は風と光に乗る。

風と光とに絶えず動く風景の中に、あゝ、私はまことの清閑を求めよう。目の大きい子よ。

先生の作品は今月は五首と少ない。この頃先生は銀座の森田屋の経営を任せていたか

ら、(1)の歌はその折のものだろう。

森田屋は父寅蔵の姉ツルの嫁ぎ先、主人の又兵衛は実直な働き者で「八丁目の資生堂が女のおしゃれ店なら、七丁目の森田屋は男のおしゃれ店」と言われるほど高級な舶来雑貨を扱うハイカラな店だった。

それはともかく「きしる電車」は当時の電車で、森田屋の前を通る電車に悩まされたと、先生は珍しく愚痴をこぼされている。

(2)の歌、(1)と連作かどうかは分かりかねるが、雨の音はたしかに人の心を和ませてくれる。雨の音が周囲の雜音を消してくれるからである。

(3)の歌、車中のスケッチ。雨が日暮れを佑しく心許なくさせるというのは、多くの読者も経験があるだろう。

(4)の歌、二、三句は今日では物議を醸しかねない表現だが愛嬌があるではないか。先生もなかなかおやりになる、と苦笑した歌。

(5)の歌、下車した人を目で追つた歌、外の光景がそのまま歌になつていて。

次いで前月歌壇合評を読もう。評者は杉浦翠子、橋本政一、今井嘉雄、村野次郎である。

橄榄

あら土にこりて白くおく霜をふみくだき

つたのしもわれは

おく霜のましろきに照る朝日光このひる原

にわれらばかりぞ

吉植 庄亮

(翠子) (一) のお歌、「ふみくだきつゝ」は

「おく霜」を受けて云うに強すぎて、まるで、

石炭殻をでも踏んでるやうです。しかし、「あ

ら土にこりて」とこの霜に註釋がついてる

のを見るとこれは「霜柱」位の荒々しいもの

であるかも知れない。さうするときは、「ふみ

くだきつゝ」は相當と思ひます。但し結句は

いけません。吉植さんは田園生活をなすつて

から、なかなか良い歌を見せて下さいますが、

その代り、お酒を呑して酔つぱらつた時の締

まりなしのやうな處をも度々見せられます。

「たのもしもわれは」などは、その手です。酔ひ

どれが、ぐどくど云ひます、さういふ時は私

達は「もう判つますよ、一度仰れば澤山」か

ういひたくなりますね。この結句に對しては、

(二) のお歌にしても、結句が失敗です。「ば

かりぞ」は詩の品位をさける詞づかひです。

選歌の中にも、「こ、に自分ひとりだとか」い

ふ心持のが、いくつもあります。大家は、か

ういふ境地から浮かび出なければ、義理が悪いでせう。

アララギ

磯のべに明けそめにける湯にゆきて下りて

ひたらむ今朝もしづけく

下りたちて渚にくればあかときの小暗め海

に冲つしらなみ

中村 憲吉

(嘉雄) (一) の歌、随分ごたごたとした表現

である。斯う小刻みに一々動作を説明しなく

てもよからう。(二) の歌は(一) よりはい。

しかし中村憲吉と云ふ署名を除けば、果たし

て人々はこの歌を採るだらうか。二首共に、

中村氏會心の作とは受け取れない。

(次郎) 今月發表した歌を見ては、萬事承知し

てゐる氏が何處邊に落着くか一寸見當がつか

ない。この二作なども矢張り氏の停滯期に属

すべきものではあるまいか。(一) は一首中に

氏としての詠歎が見えてゐる。一二句は想像

でなく實感であるべきだが、一首詠み終ると

さうではなく了解される表現もある。此所

に疑念を持つ。

(二) は定まつた手堅さではあるがもつと潤

ひがあつてもよくはあるまいか。動かせない程堅すぎはしないかと思ふのである。